

日時 平成26年5月20日(火) 15:00~16:30

場所 岡山県立図書館 サークル活動室

1 開 会

2 あいさつ

(伯野保健福祉部長)

ご出席いただきまして、まことにありがとうございます。また、平素より本県の保健医療福祉の推進にご協力、ご尽力いただきましてまことにありがとうございます。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

さて、皆様ご承知のとおり地域枠の学生さんの第1期生がちょうど今大学の6年生でございまして、いよいよ今年初期臨床研修を行う医療機関の選択を開始するという状況になっております。そうすると、地域勤務までの時間というのはかなり限られている状況になってきておりますので、キャリアパスの構築など当センターに課せられた役割というのは大変ますます重要になってくるという状況になっております。

今年2月に開催させていただきました会議では、地域枠学生の卒後キャリアアップパスについて皆さんにご協議いただきましたが、大変活発なご意見をいただきまして、県としても当然ですが改めて地域枠医師への期待の大きさというものを痛感した次第でございます。

本日は、前回ご議論いただきましたキャリアパスを踏まえまして、地域の病院が地域枠卒業医師の配置を希望するかどうかという調査を行っておりますので、そうした調査結果の概要、また、初期臨床研修医を県内に呼び込むための取組等についてご協議をしていただきたいと考えているところでございます。

今後、地域枠の卒業医師がそれぞれの地域で生き活きと働いて、そしてしっかりと役割を果たしていただけるよう、是非委員の皆様方におかれましては忌憚のないご意見をいただきますようお願い申し上げます、簡単ではございますが私の冒頭の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいいたします。

(糸島センター長)

皆様、お忙しいところ、また遠くからおいで先生もいらっしゃると思います、どうもありがとうございます。

我々地域医療支援センターの仕事は、少人数の割には比較的会合を行い、少しずつ進んでいると思っておりますが、本日、皆様にご批判をいただけたらと思っております。

この場で特に、お願いしておきたいのは、去年の7月に皆さんに参加していただいてワークショップをたくさんの方でさせていただきましたが、今年は7月27日に開催を予定しておりますので、是非ご参加をしていただけたらと思っております。

今日もどうかよろしくお願いいいたします。

3 議題

(1) 岡山県地域医療支援センター活動状況について

ア. 地域医療支援センターの予算・決算並びに事業実績、事業計画について

(事務局が資料に沿って説明した後、質疑応答)

(塩出委員)

まず、確認させていただきたいのだが、レジナビフェアは、初期臨床研修を行う病院を医学生が選択するための病院説明会のはずだ。地域医療支援センターの主な業務は地域枠の学生の対応だと考えていたが、岡山県以外の研修医呼び込んで、地域医療を一緒にやってもらうために案内するというようなことをしているのか。どういったことを主にPRされているのか内容を教えていただきたい。

(糸島センター長)

岡山県、NPO法人岡山医師研修支援機構が合同でブース出展をしており、岡山県に少しでも多くの医師に来てほしいという立場で実施している。NPO法人は、岡山県のみならず中四国、兵庫にも来てほしいという立場でこの地域の病院をPRしている。

(塩出委員)

実際には県に来ていただいて、どこかの医療機関を紹介するという形になるのか。

(糸島センター長)

そうなる。特に、岡山出身で県外に出ている人が、岡山近隣に戻ってきたい場合に、その相談に乗ることが多いと考えている。

また、県外の医師で、過ごしやすい地域であること、地震や災害が少ない等の理由で来られることもあると考えている。

(山崎委員)

25年度の決算と26年度の予算の計上はかなり増額されており、その増加分はほとんどが事業費との説明だったが、これは25年度の決算の内容、成果が良かったことから、予算を増額されたとの理解でよいか。

(則安医療推進課長)

地域医療支援センターにかかる予算は十分に確保している。

今後、地域医療支援センターにおいては、地域枠の学生が卒業し、臨床研修を行うことになるし、また、先ほどレジナビの話もでたが、臨床研修医の確保といった部分にもしっかり力を入れてやっていく必要があると考えている。これらのことから、ご指摘のように、センターに関して多額な予算を計上している。この予算を、できるだけ有効に活用してまいりたいと思っている。

(山崎委員)

その他の額が大きいので、どのようなものが入っているのかを説明いただきたい。

(事務局)

25年度決算その他計上分についてだが、その内訳として消耗品費130万円、通信費135万円、センター分室借り上げ料等の比較的小さな経費を積み上げているものである。合算するとこの程度の金額になっている。

イ. 地域枠卒業医師の配置希望調査の概要について

(事務局が資料に沿って説明した後、質疑応答)

(園尾委員)

県北の病院であえて希望しないというのは、それなりに理由があるのか。

(岩瀬専任医師)

該当の病院の病院名をみると、特に地域枠の医師が3年目のときにあなたの病院で指導できますかといった形で問うているので、うちの病院ではそんな教育指導する体系ではありませんよといった格好で、配置は希望しないと書いている病院もあった。

また、病院の地域における役割としまして慢性期医療のみやっている病院の場合、卒後3年の医師がうちに来られてもまだちょっと早いだろうといった観点で配置を希望されないという病院もあったものと判断している。

(園尾委員)

配置するのは卒後3年目からか。しかも、教育をしてほしいという条件がある。

(岩瀬専任医師)

強く打ち出してこのような項目を聞いているので、うちではちょっとっていう病院であれば、希望することが難しいのではないかと考えている。

また、単科の病院なんかも県内では増えており、そのような事情も加味して考えるべきかと思っている。

(園尾委員)

精神科も入っているのか。精神科も対象になるのか。

(岩瀬専任医師)

配置を希望する病院を探すというのが第一の目的となっているため精神科病院も対象としている。

(石川会長)

配置を希望しないという病院の状況は詮索しなくてもいいということだな。

(岩瀬専任医師)

地域枠卒業医師の身分は、病院に所属する病院職員であるため、地域枠卒業医師の研修のために、病院がお金を出すということになる。無料の医師なら欲しいが、病院の金を使ってまで欲しいのかどうか。

(石垣委員)

地域別の内訳には、希望すると検討中とあるが、高梁、新見圏域と一緒に計上されているので、新見地域のみ状況を教えていただけないか。

(岩瀬専任医師)

新見地域の4病院のうち回答があったのは3病院であり、その3病院とも配置を希望するとの回答だった。

(園尾委員)

私の病院でどのような貢献ができるかまでは、まだ具体的には考えていないのだが、一つのやり方としては、卒後3年目の人を受け入れ、その医師に、どのような患者であれ、全て受け入れて診てもらおうようにするということはできるのかなと思う。このよう

にすることで、実際に地域で勤務する際に、役に立つ医師が育つのではないかとは思っているからだ。

実際、私の病院がどのように回答しているか全く知らないのだが、このような状況を知った上で、もし来たいと考えてくれる医師がいれば、対応したいと考えている。

例えば1～2年ぐらい、私の病院で研修し、その後、地域へ行ってもらうことは可能ではないかと考えている。これはあくまでも私見であり、病院の総意ではないが、このようなことは可能ではないかと考えている。

また、この調査の趣旨に岡山大学、広島大学とだけ書いてあり、川崎医科大学がどう関わっていったらいいのかな、という気持ちで聞いていたが、今までのこの委員会での話を聞いて、そのようなことはできるのではないかと思ひ発言した。

(則安医療推進課長)

今回は、全病院に対してアンケート調査をさせていただいているが、県としては、地域卒卒業医師に地域勤務として期待されるところがやはりあると考えている。

そういうところがまず固まるというのがあるが、その一方で、本人の専門性を高める義務内の後期研修、義務外の後期研修も取得できるようにしている。

これらの研修は、医師本人の希望に対応できるようにしているが、先ほど発言いただいた園尾委員の病院での研修のように、非常に勉強になるというようなところでの研修受講は、是非積極的に引き受けていただいて、質の高い医療を提供できるような医師に養成していただきたいと、我々としても逆にお願ひしたいような気持ちでいる。

(園尾委員)

具体的になり、皆様と気持ちのすり合わせがうまくいった段階でまた考えてみたい。

ウ. レジナビフェアでの岡山県ブース出展について

(事務局が資料に沿って説明した後、質疑応答)

(糸島センター長)

昨年のレジナビ大阪では、岡山大学とNPO法人岡山医師研修支援機構と岡山県とが合同でブースを出した。

今回の大阪については、前回同様の出展形態で出展し、レジナビ東京については、どのような状況かを把握するため出展したいということを考えている。実施するに当たっては、できるだけ共同でやって、宣伝効果を上げたいと思っている。

(片岡教授)

私も去年レジナビに行ってみたが、県単位での取組がかなり進んでおり、一体的なブースでの出展や、のぼりを掲出等に県単位で取り組んでいるところが非常に多かった。

今回、県全体でそのような取組を行うことは、東京、大阪の学生への訴求力はもちろんだが、一端、東京、大阪等の県外に出て、卒後、岡山県に戻ってこようかなと思っているUターン組の学生にとっては非常に心強いのではないかと考えている。

(石川会長)

このような病院説明会に参加することの効果はあるのか。

(片岡教授)

それは十分ある。

(糸島センター長)

参加した人数まではっきり分かっていないが、岡山出身者が、東京等の他県に行き、レジナビに出てきて説明をする人が、岡山ブースにも行くようにと連れてきてくれることが結構あった。以前も、他県で活躍している岡山大学の出身者が助けてくれたことがあり、結構効果を上げているのではないかと考えている。

(園尾委員)

以前は、同窓会とか、そこで大阪とか東京に行っている人を把握できる枠組みがあり、そこを活用し、ターゲットになる人に案内状を送るとか行っていたが、今回の取組も効果的にするのがいいような気がする。ただ、何かやるといっても、余り関係ない人にとっては、あまり効果はない。

同窓会等で、どこに誰がいるのかを全部把握するというようなやり方も、戦略としてはあるのではないかと考える。

(石川会長)

個別の番号の割り振りが必要になるなあ。

(糸島センター長)

高校の卒業生の進路が分かればやりやすいが、なかなかそこまでしてないのが現状だ。また、岡山県や中四国の医師の子弟が他県に行っている場合、その子弟に、帰ってきてもらえるための情報提供として、岡山県医師会報で宣伝を入れさせてもらっている。岡山県の医師で子弟がおられる人は、それを見てきていただきたいと思っている。

エ. 地域枠学生の奨学金の奨学金返還事案について

(事務局が資料に沿って説明した後、質疑応答)

(片岡教授)

今説明いただいたとおりだと思うが、地域枠1期生ということで非常に情報が少ない中で受験した学生であるということも大きかったものと思うし、本人希望が表明された後も、県職員にも面談していただくなど、地域医療支援センター、大学としても慰留に何カ月も努めたが、難しかったということで、大変残念に思っている。

(忠田委員)

離脱した学生は、今後、どうなるのか。

(糸島センター長)

今後は、普通に卒業して一般の医学部の卒業生と同じような扱いになる。

(〇〇委員)

添付の募集要項は、新しいもののようだが・・・。

(糸島センター長)

この募集要項は一番最近のもので、初期の募集要項にはこのように厳しいことは書いてなかった。

(岩瀬専任医師)

このような事例は今まで想定されてなかった。

確かに、現在の募集要綱では、入学後であっても入学を取り消すと書いてはあるが、これがもし5年生、6年生となった場合であっても、それまでの時間全てを全部キャンセル扱いとし、一から出直してなさいとするのかどうかについて、大学の見解についての確認をとっているところだ。

(石川会長)

募集要項に期限は書いてなかったようだが。

(岩瀬専任医師)

期限についての記載はない。

(片岡教授)

入学後であっても、入学を取り消すっていう文言は今の2年生以下から入った者であり、今の3年生以上にはもう全くそのような一文はない。

(〇〇委員)

一文をつければ学生は納得するのか・・・。

(岩瀬専任医師)

実際、納得しなかった学生本人との裁判闘争になってしまったらどうするのかといった部分について、まだ確認はとれていない。

(〇〇委員)

やはり条文等を見て判断することになるのではないか。

(岩瀬専任医師)

このような一文が要項に書いてあったとしても、社会的な一般通念上の契約を下回っている約束でしかないのであれば、それは違うのではないかと裁判官には判断されることになるのではないか。

(糸島センター長)

辞退しにくくなるのを期待している。

(岩瀬専任医師)

ここに明記していることで縛りたいわけではなく、地域で働くのは楽しいよということを学生の6年間でずっと見てもらった上で、地域勤務していただけるのを期待しているが、今までは、確かに入学したらやっぱり地域枠をやめたっていう学生が出てきたときのために新たに加えたというものでしかない。実際それが何年目のときにどういうふうに機能するのかについて具体的に検討ができていない状況だ。

(則安医療推進課長)

この要項の文言で、実際に入学を取り消されるようなことを言われる可能性極めて低いのではないか。それで、実際に卒業した後のどこへ勤務するかというのは職業選択の自由のような、そういったことで奨学金の返還の免除に影響なるかならないか、その、これはルールであり、それを返すと言われたらもうその人の人生ということで尊重される形になると考えている。こう書くことによって6年間は奨学金をきちんと受けていただく、これで入学取り消しになっても嫌だということはないと思うので、6年間き

ちんと地域枠として教育を受けていただいて、その過程で魅力をきちんと理解してそちらの方向に進んでいただくということを期待したいということを考えている。今、地域医療人材育成講座で地域枠の学生に限らず広く地域医療の魅力については伝えていただいており、それらの仲間の中できちんと義務を果たしていただく、そちらのほうにつなげていくための一つのルールを追加したということであり、実際にこれでその人の人生を縛ってしまうということは、それはあり得ませんし、逆にあってはならないということで、その6年間はきちんと地域枠として教育を受けていただいて考えていただくというのを担保するための一文というものにご理解いただければと思う。

(忠田委員)

今回、改定したキャリアパスでその人の望みはかなえられなかったのか。

(岩瀬専任医師)

慰留と同時並行で、キャリアパスについての検討を進めていたので、この案も踏まえて、慰留はしたが、本人はやはり、希望する専門科の専門医として、ずっとその専門科の認定施設を中心に医療を行っていきたいので、プライマリー・ケアをやる医師として地域で働くことは難しいとの強い意志を示された。

(佐藤教授)

現在、なるべく研修ができるように、1年だった後期研修を2年に延ばすなどの措置をとったところだ。

しかし、それ以前は後期研修1年間で、6年間の地域っていうことになっていたし、当時1期生であり、何も決まっていなかった状況で入学していたことも確かに事実だ。

入学後、少しずつ様々なことが決まっていっていったものであるが、問題点を洗い出して協議している最中で、このようなことになってしまい、残念だ。

オ. 社会保障研修会・国民医療費の予測

(糸島センター長が資料に沿って説明した後、質疑応答)

(石川会長)

糸島先生の予測が一番、希望を持てる医療費の推計だ。

(糸島センター長)

これは、一面では医療費の問題だが、これは同時に1.3の係数で割ると必要医師数でもある。必要医師数は2025年をピークに医療需要が減ってくるので、どんどん必要医師数が減ってくることになり、余りにも医師を養成し過ぎると今度は医師の過剰を引き起こしかねないので、医師の需給についても心配もして欲しいと考えている。

(石川会長)

この推計はどこまで分析するのか。岡山県だけの推計ではもったいない。

(園尾委員)

国のデータと反対だ。私らは厚生労働省のデータを盲信し過ぎとるからね。

(伯野保健福祉部長)

この分析について1つだけ気になる部分があるのだが、1人当たりの医療費が伸びな

いと的前提とこの分析がなされているが、今後も最先端の医療がどんどん出てくるので、診療報酬が全く変わらなくても1人当たりの医療費っていうのは自然と伸びていくと考えるべきではないか。それをプラスマイナスゼロにしているっていうことは、今後診療報酬は、マイナス改定が続くという前提での予測と理解してよいか。

(糸島センター長)

そこは上手に財務省が全体の医療費をコントロールしていくのではないかと。

(伯野保健福祉部長)

それはそのとおり。だからこそ、まず改定率を出すことになる。だから、それはもうベースになってくるものであり、こういうデータがいいのだからというふうにまず絵を描き、であれば、この部分の改定率はマイナスじゃないとだめだという話になる可能性があると思う、あとはそういうふうに財務省は考えている。

(山崎委員)

財務省が抑えて、自分らで抑制した前提のもとということですね。

(伯野保健福祉部長)

そのとおり。

(山崎委員)

政策的にもうちのまちは今年から健康づくり条例を制定し、特定健診をもっと健診率を上げていこうとの取組を始めた。ただ、そうしても、すぐには、良くならない、一時的には、健診率を上げることで、受診料が上がっていく。ただ、5年、10年後を見たときに高額医療を抑えることができるのではないかとこのように考えている。

このように、統計というよりは政策をどう打ち出すかというのも効果としてはあるのではないかと。ただ、行政の取組に賛成する人ばかりではないので大変ではあるが・・・。

(石川会長)

人間ドック協会のデータが大分また出たら、またそれによる反発がくることになる。そのような繰り返しになると思う。とにかく、この分析により、それぞれの先生は、少しはほっとすることはできる。

(糸島センター長)

このくらいの推計でないと、もうやっていけないと思う。

(石川会長)

この推計を目標にしたいということだから、我々医療関係者も我慢が必要だ。

(2) その他

(小寺委員)

今まで、地域枠学生についての議論だったように思うが、私が職務上知っている市町でも、医学部の学生に奨学金を出している事案があると聞いている。

市町の奨学金制度の詳細はよく知らないのだが、今の説明を聞いてみると教育プログラムの何かが入って、そのまま行ってしまうと研修医時代もあるし、そのトレーニングのこともあるし、その学生さんも将来大変だろうなというふうに思ってしまうし、その

自治体にとってもお金は出したけど確保できるのかどうかという懸念にもつながりかねない。もし希望があればということが前提ではあるが、この地域医療支援センターの教育プログラムだとかを利用することは可能なのか。

(糸島センター長)

どこの大学に行っている学生になるのか。

(小寺委員)

医師を養成するには、教育プログラムが必要だという話はしているのだが、どこの大学で、どういう条件かといった詳細は教えていただけていない。

(岩瀬専任医師)

学生に対して、奨学金を支給する形なのか。

(小寺委員)

県外の医学生に、奨学金をやはり月額20万円を支給しているとのこと。

(則安医療推進課長)

市町村がそのような取組をしているといったことは、具体的に聞いたことはないが、あってもおかしくない話だとも思う。

岡山県出身の方で他県の大学に進み、また帰ってきてくれるという可能性が高いのであれば、我々としては一定の努力をして、今その地域卒の学生さんとか自治医大の学生さん、それから卒業した医師などと一緒にできるだけ交流して岡山になじんでいただき、地域で活躍いただきたいというふうに考えている。このような部分で一緒に相乗りしていければ、是非つながりを持ち、岡山で研修を受けていただきたいと考えている。後期研修を岡山で受けていただくとか、地域でいろんな関係者との人間関係を作っていただくとか、長くご活躍いただけるような方法でコーディネートできればいいと思う。

ただ、具体的に、処遇等については、県の地域卒医師は県制度のルールの中で動くことになるので、それをそのまま適応という形ではならないかもしれないので、そのあたりは調整は必要だとも考える。

いずれにしても、是非一緒にできるところは一緒に行い、岡山に帰ってご活躍いただく方向で我々もできることをしていきたいと思っているので、どんどん紹介していただければと思う。

(小寺委員)

わかりました。紹介して差し支えないか確認してみたい。

以上